MAKIBA TSUSHIN

愛知老人コミュニティーセンター　ニュース

「まきば」通信

第4号

日本基督教団
愛知老人コミュニティーセンター
〒470-0111　日進市米野木町南山987-88
TEL. 0561-74-5548
FAX. 0561-74-5561
ホームページ　http://www.mb.ccnw.ne.jp/makiba
E-mail　makiba@mb.ccnw.ne.jp
発行日　2004年1月25日
発行人　森岡　廣實
イラスト　森島　利定

兄弟姉妹が共にいる祝福

名古屋学院長　**柿沼敬一**

「見よ、兄弟が共に坐っている。なんという恵み、なんという喜び」（詩編133篇1節）。この歌はおそらく世界に散らされて生活しているユダヤ人（ディアスポラ）が、過越祭のような大祭の時に、エルサレム神殿に詣でる時の喜びを歌ったものでしょう。

ここで言っている「兄弟」とは血縁の親族のことではなく、「契約による信仰の仲間」を示すものでしょう。そこに民族的な愛が示されています。しかし、そこにはイスラエル対パレスチナ、アメリカ対イラク、アフガニスタンのような、信仰・思想の違う民族間の愛は存在しないで、イスラエル対アラブ諸民族の長い歴史も、互いに憎しみ合い、排除し合う歴史以外の何物でもありませんでした。そうしたなかで、ルカによる福音書のクリスマスの記事の中に心温まる記録を発見します。

エルサレム神殿に毎日通いつめて、ひたすら礼拝と祈りと賛美に明け暮れるシメオンとアンナの存在です。彼らは他のイスラエル人（特に祭司、律法学者等）のように、この地上に、神の選民と自負するイスラエル人の支配する世界が到来するというような考えにはとらわれないで、ひたすら礼拝生活にはげむ、ある聖書学者のいう「地の平穏者」と呼ばれる人々でした。

アンナの年齢については、現在の聖書の訳の通り、84歳とする説と、「夫と死に別れてから84年」とする説があります。これですと106, 7歳になります。いずれにしても大変に高齢です。シメオンもアンナもこの世に望みをおかず、ひたすら信仰による救いを求め続け、そして今イエスの誕生に接して、救いを確信し、喜んだのです。ここに、「祝福される老人」の姿が見られます。

「まきば」の入居者である、人生の先輩である皆さんが「神への信仰によって営まれる共同体」の中で、神の祝福を確かに受けとめてくださることを祈念しております。

「希望の旅路を共に生きる」
「まきば」理事
真木　芳子 ……2

秋から冬にかけて「まきば」で
行なわれた楽しい行事 ……3

俳句・短歌 ……4～5

「受けるより、与える豊かさ
— 2つの食事 —」
原　榮作 ……6

●

“施設長”の「まきば」報告
施設長・館長
森岡　廣實 ……7

「希望の旅路を共に生きる」

「まきば」理事　真木芳子

長い年月準備されてきた、シルバーホーム「まきば」建設は1993年度中部教区総会において正式に決議されました。今後中部教区が負うべき重大な責任を思いつつ、私は、この会議と新メンバーで構成された常置委員会の席に緊張した面持ちで加わっておりました。さらに何故であったか、理事のひとりとして任命され、今日に至っております。

開設以来７年の歩みの中で、産みの苦しみと痛みを伴いながら、情熱と忍耐をもって労してくださった多くの方々のことを思います。また人の思いを越えて、神が時々に「まきば」の歩むべき道を示し、導いてくださいました。

これからも、この事業が人間の業でありながら、神のご計画にそって祝され、展開されていくことを願い信じております。

「まきば」が開設した年、土岐紀子さんという方が90歳を前にして入居されました。紀子さんにとって中部教区は、ご主人が中部教区議長をされ、御器所教会で28年もの長きにわたってその生を終えるまで身を捧げてこられた思い出深い地でもありました。

ある日、紀子さんからのお電話で、最愛のご長男が突然天に召されたこと、それに伴い私とも親しい間柄であり、長く入院生活をしておられる従姉妹のＮさんの代理人としていっさいを委ねられないかという内容でした。

このようなことがきっかけで、Ｎさんを見舞い、紀子さんを「まきば」にお尋ねする機会が度々与えられたのでした。時々臥されながらも、クリスマスには、全国から届いたカードが部屋の鴨居にずらっと飾られました。草花を愛し、散った一ひらの花も押し花として作品にされ感心したことです。美味しいお茶をいただきながら、「聖書の学び」を楽しみにしておられること、和服を着て集会室でお誕生日会をしていただいたこと、時には買い物ツアーでお寿司を買ってきていただき、お仲間と一緒に食べたこと、職員の方々がとてもよくしてくださることなどなど、「まきば」での生活を楽しそうに話してくださいました。

やがてＮさんも天に召されましたが、紀子さんは２人の愛する人を失った事実をしっかり受けとめ、悲しみをすべて神に委ねて、こちらが驚くほど立派に事後にすべてをなし終えられたのでした。３年に満たない「まきば」での生活でしたが、感謝と心の平和の中にこの方の生は終わりました。行きずりのような私にとって、また周囲の者にとってもかけがえのない尊い歳月であったことを思いおこす度に、溢れるばかりの神への感謝と厳粛な思いにかられます。

「受けるより、与える豊かさ ― 2つの食事 ―」
～マルコによる福音書 6章14～44節～

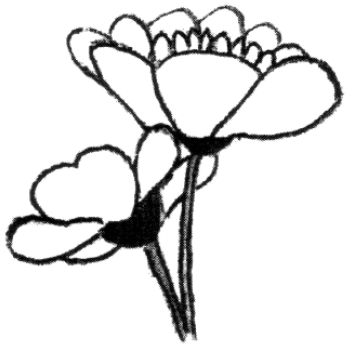
無任所教師　原　榮作

聖書（旧約と新約）には、食事の場面がとても沢山書かれています。私は「食べる」という人間の生きる基本的な視点から聖書を読むと、聖書の真理、福音の真理が鮮やかに浮び上がってくると思うのです。問題は「どのように食べるか」ということです。

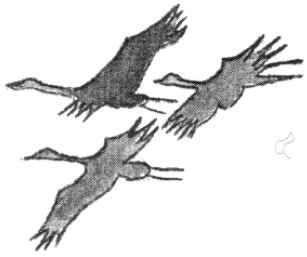
『マルコによる福音書』6章には、2つの食事が書かれています。14～29節の見出しは「洗礼者ヨハネ、殺される」とありますが、ガリラヤ湖の西南岸ティベリヤで、領主ヘロデ・アンティパスの宮殿で、王の誕生日の祝宴の場面です。そこには「高官や将校、ガリラヤの有力者などが招かれ」山海の珍味が並べられた豪華な祝宴です。そこへ「ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた」のです。ヘロディアはもとヘロデ・アンティパスの兄弟フィリポの妻でしたが、アンティパスの妻になった王妃です。この不義の結婚を洗礼者ヨハネは激しく非難したため捕らえられ投獄されていました。ヘロディアの娘サロメは連れ子でしたが、その踊りが客を喜ばせたので、ヘロデは気を良くしてサロメに「欲しいものは何でもやろう。この国の半分でもやろう」と言ってしまいます。サロメは母に相談し、「ヨハネの首を」と答えます。そして「ヨハネの首が、盆に載せられて」運ばれました。折角の豪華な祝宴は、一瞬の間に血塗られた陰惨な場面に変わったのです。オスカー・ワイルドや三島由紀夫の『サロメ』は、この場面をテーマにして書いています。

この食事に続いて、もう一つの食事が書かれています。「5000人に食べ物を与える」（6：30～44）です。ガリラヤ湖の北西部の淋しい野原で、主イエスが５つのパンと２匹の魚で5000人を養われた有名な奇跡物語です。これは四つの福音書に共通して記録されています。「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ」とあります。そこには病気の人々もいたでしょう（ルカ）。時がおそくなったので、弟子たちはこの群衆を早く解散させ各自で食べ物を買わせようとした時、イエスは「あなたがたが彼らに食べものを与えなさい」と命じますが、弟子たちはどうすることもできません。『ヨハネによる福音書』では、一人の少年が「大麦のパン5つと魚2匹」を差し出したと書かれています。おそらく少年の貧しいお弁当だったのでしょう。イエスはそれを受け取り「天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した」と書かれています。

主イエスは「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒言行録20：35）と言われました。自分さえ幸福であればよいと「受ける」ことに熱中し、それを邪魔する者を排除しようとする生き方からは地獄の世界が再現されます。それに対して、どんなに貧しい小さなものでも、困っている人のために差し出し、祈って「分かち合う」（シェアリング）時、与える人も受ける人もすべて満ち足りた喜びが生まれるのです。主イエスのご生涯は、貧しい人と共に生き、病める人をいやし、悲しむ人を慰め、最後には十字架におかかりになってご自分の命をお献げになりました。この主を信じ、従って生きましょう。



“施設長”の「まきば」報告



施設長・館長　森岡（もりおか） 廣實（ひろみ）

この頃「まきば」の回りにもいろいろな変化が見られるようになってきた。まず、「まきば」創立の頃からの念願であった「まきば」東側道路が簡易舗装され、それまでは通過する自動車から巻き上げられる土埃に悩まされることがよくあったが、その悩みが解消した。今は通過する自動車に会っても土埃を除けて顔を覆うようなことはなくなり、みんな喜んでいる。また、昨年７月に「まきば」から30ｍほど東に向かったところに、痴呆対応型グループホームが出来た。朝や夕方、犬を連れて散歩をされているホームの方に会う。言葉を交わしたり、微笑みながら通り過ぎて行かれる。また、更に、11月からは、新型特別養護老人ホームが、80ｍほど西に下がったところにオープンした。そこで働く方や訪れる方たちの往来が多くなってきている。「まきば」から、東西へと目を移すと、この一角がいつの間にか、「シルバー福祉ゾーン」になって来たと言う感が深まる。その事もあって、「まきば」の前を走っている道路が、カラー舗装された。鮮やかな黄色に道路が塗られている。それは、“注意”を意味するのであろう。この辺りを通る車に、注意してゆっくり走ってくださいとメッセージを送っているのである。

「まきば」南側の生垣に沿って花造りなど楽しむ土地がある。愛知牧場のご好意により、土と花を愛する入居者の方々の為に使わせて頂いている場所である。冬でも晴れた穏やかな日は、南からの太陽の光が降り注ぎ、気持の良い陽だまりの出来る場所である。いつも赤や黄色の花が咲いていて、道行く人の目を楽しませてくれる。時々、足を止めて、新しく手入れされた花壇の土や花を眺めていると、土や花を愛する方たちの手の温もりが心に伝わってくる。北風の吹く寒い日でもこの一角に目をやると、どことなく心が和み、温まるような気がする。

11月14日に、秋の“防災訓練”が行なわれた。例年、春と秋2回の防災訓練が行なわれている。入居者や職員によって構成する防災委員会のメンバーが話し合い、準備を進めた。訓練の内容は、避難の仕方、消火器の使い方、消火栓の実際の使用や一階の防火扉の開閉の確認などであった。避難訓練は、厨房から火が出たと言う想定で、各階の参加出来る入居者が、建物東側にある非常階段を通って避難した。「火事です。避難してください。」と、火災通報装置から声が流された後、「皆さん、慌てないでゆっくりと落ち着いて避難して下さい。」と、マイクで付け加えた。慌てて、怪我をしては訓練の意味が失われるからである。入居者、職員を含めた参加者約50名が、玄関前の広場まで避難し終わった後、日進消防署の署員の指導のもとに、職員による消火器や消火栓を使用した訓練を披露した。約1時間の訓練が終了した後、食堂に集まり、講評を聞いて、秋の防災訓練を終えた。しかし、考えてみると、「まきば」に入居しておられる方たちは、その年代から言って、過去に幾つもの非常時を乗り越え突破してこられた人たちだということである。非常時の心のもち方は、むしろ、入居者の方がたから教えて頂かなければと思った。

11月中旬過ぎに、庭師さんが入って「まきば」の周りの植木や生垣などの剪定がなされた。夏のうちに伸び放題になっていた枝が刈り揃えられて、散髪をしたあとのようなサッパリ感があり、建物全体がちょっと引き締まったように見える。年に一度の手入れであるが、少しずつ大きく成長してきた庭木を見るにつけ、8年の年月が「まきば」を創り上げてきたのだと思う。刈り込まれた垣根や庭木が新たなスタンスを整え、更に次の1年へと伸びていくように、これからの1年、「まきば」の更なる発展を願うものである。

「まきば」の周辺風景 ❶

■愛知三愛福祉会

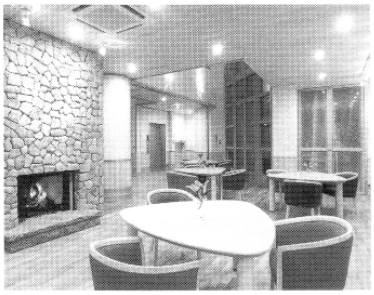
愛知三愛福祉会は、キリスト教精神を基盤に据え、「神を愛し、人を愛し、地を愛する」という『三愛精神』をもって老人福祉施設を運営しています。設立にあたっては、理事長尾崎志満子を中心にキリスト者個人有志12名が祈りを合わせ、まさに神の奇しき恩寵としか考えられない出来事を私どもは経験いたしました。

今後の歩みもまた神の豊かな尊き守りの中にあることを確信しつつ、運営をしています。地域によって創られ、地域と共にあり、地域と共に拓いてゆくということをモットーに、建物の基本設計や介護内容、ボランティアの関わりなどを市民参加のワークショップを継続的におこないながら、建築を進めてきました。

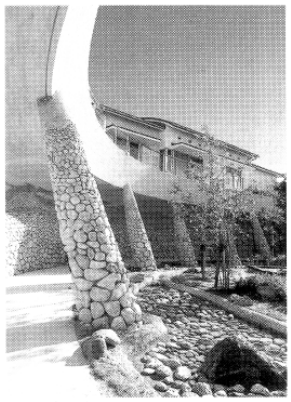
その中で一人ひとりを大切に支え、一人ひとりと向き合う介護を目指し、利用者の方々が、安心して、共に生きる喜びや生きがいを見つけられる生活の場としてのホーム作りをしてきました。

2003年8月に、グループホームあいわ開所。そして同年11月に特別養護老人ホームのぞみ、デイサービスセンターさんあいが開所いたしました。のぞみは8～11人の利用者の方が生活単位を構成し、介護スタッフと共に生活をする、いわゆる居住福祉型として愛知県で初の新型特養です。地域交流スペースでは、地域の障碍者団体の方が、日替りで喫茶コーナーを運営してくださっています。是非コーヒーを飲みにお出かけ下されば幸いです。　（山内　誠）

▲建物外観



▲地域交流スペース



▲中庭

編集後記

昨年、愛知老人コミュニティーセンター推進委員会が、年２回発行の予定でこの通信を創刊しました。今回「まきば」通信第４号を予定通りお届けできますこと、感謝です。

さて「まきば」のパンフレットには、「ホームのこころ」として、１．キリストのこころ　２．お互いの助け合い　３．人生最後のよろこびがあげられています。数年前、まきばの方々から「まきばの歌」を募集したのですが、そこに、「ついのすみかとさだめしは、神の恵みと導きなり」（中村婦佐姉）、「いざ、友と手をとりて、趣味に奉仕と希望持ち」（後藤正子姉）、「悩める時も光を望み」（富田清子姉）、と歌われていました。「まきば」に入居されている方々から「ホームのこころ」がうかがえてうれしいことでした。

これからも、まきばの皆様が「光の中を歩まれる」様子をこの通信でお届けできればと願っています。（榎本）